

## クルジュロヴァのマドンナ

### —15世紀初頭の中欧における「美しきマドンナ」の系譜—

植松 苑子（東京藝術大学）

現在ポーランド、クラクフの《クルジュロヴァのマドンナ》（ポーランド語：Madonna z Kruźlowej、英語：Madonna from Kruźlowa）は、15世紀初頭のクラクフにおける彫刻芸術を代表する木彫の聖母子像である。制作者や来歴などの基礎情報は殆ど不明であり、先行研究においては、元は彫刻祭壇の中央部に置かれていたこと、また1410年頃に制作されたことが推測されている。おそらくクラクフのいずれかの教会のために同地の工房で制作され、後に近郊のクルジュロヴァ村に移されたという説が多数派の見解だが（Dutkiewicz 1949, Olszewski 1976, 1996, Mordyński 2008）、最初から村のために制作されたとする説もある（Dębicki 1996）。

この像は、当時の中央ヨーロッパを中心に栄えた「美しい様式」と呼ばれる美術様式で作られている。この様式の中心となったプラハでは、ヴァーツラフ4世（ボヘミア王在位1378-1419年）の治世下において、絵画や写本挿絵、彫刻といった分野での芸術的な発展が目覚ましく、宮廷や工房から周辺の地域や国々へとそのスタイルが伝播していった。その中でも、通称「美しきマドンナ」と呼ばれる像は、理想化された美しさを持つマリアとイエスによって構成されており、聖母を包む衣の豊かなドレーパリーの表現や両者の身体の優雅な表現によって、このスタイルを代表する図像として展開した。また、先行研究において繰り返されてきた「美しきマドンナ」図像の様式的なカテゴリーについては複数の解釈があり、再検討の余地が残されている。

これらの背景をふまえ、本発表の目的は、第一に、この「美しきマドンナ」の系譜に属する本作品の様式的および図像的特徴を再度分析し、他の作品や独自の特徴を考慮に入れて、その位置づけを再考することである。同時代の「美しきマドンナ」の作例を幅広く紹介し、比較考察から明らかにした本作品の特徴について、その由来を考察する。本作品は立体でありながら、トジェボンの祭壇の画家に代表されるプラハ由来の絵画様式を明白に継承しており、当時流行していた豊かな動きのある人体の表現を追求しすぎず、立体と平面の複合的な手法によって画面に静的な表情を生み出している。第二に、彫刻祭壇の一部であったという仮説を元に、本作品の本来の役割を明らかにすることを試みる。具体的には、「新しい信仰」など当時のクラクフに流入していた新しい教義の影響などを考慮し、本像に求められた機能には個人の内面における観想の促進があったこと、それは祭壇という、単身の立像より大きな媒体において実践されるよう意図されていたことを検証する。

この二点を総括して、本作品がどのような意図でその姿を獲得し、それが当時の中欧の「美しいマドンナ」の系譜においてどのような意義を持っていたのか、という点に光を当てたい。